アグリ★ルネッサンス

# 農業経営きょうと

No.98
2016.秋

下間康広さん、美香さん（南丹市）
※クローズアップ　この経営者！（2ページで紹介）

CONTENTS


クローズアップ　この経営者！ …… 2ページ
紫ずきんと水稲で集落の農地を守る
― 次世代へ農業を引き継ぐために ―
下間農場　下間康広さん（南丹市）

チャレンジ農業法人 …… 4ページ
ネギと野菜苗を軸に多彩な複合経営を展開
― 担い手育成で地域の農業をリード ―
株式会社 山末農園（久御山町）

「農の雇用事業」平成28年度第5回募集 …… 6ページ

「京都農人材育成センター」の経営研修が始まります！ …… 6ページ

空き家・農地の検索サイトがオープンしました …… 7ページ

「農業体験農園開設セミナー」を開催します …… 7ページ

農業法人ニュース …… 8ページ
― 京都府農業法人経営者会議の取り組み ―
■全国セミナー2016in北海道が開催されました
■京都府農林水産部との情報・意見交換会を開催

編集局から

クローズアップ
# この経営者！

# 紫ずきんと水稲で集落の農地を守る

—次世代へ農業を引き継ぐために—

紫ずきんを収穫する下間さん夫妻

## 南丹市園部町　下間農場

## 下間（しもつま）　康広（やすひろ）さん（42）

下間康広さんは就農した翌年、地域でいち早く黒大豆の枝豆「紫ずきん」の栽培に乗り出し、施肥・栽培方法に試行錯誤を重ねながら、規模を拡大してきた。そして紫ずきんの生産・販売で収益を確保する一方、集落の「農」を守るために農地を引き受け、米づくりにも取り組む。そこには農業の“攻め（紫ずきん）”と“守り（水稲）”の両立をめざし、地域とともに歩む農業者像がはっきりと映し出されている。

### いち早く「紫ずきん」に着目

南丹市園部町の南八田地区。電気柵で囲まれた小区画の田畑が広がる山あいの集落に、下間農場はある。平成に入って父の貞夫さん（71）が脱サラし、集落の農地を託されて米づくりを始めたのがきっかけで、その後、康広さんの就農を機に少しずつ規模を拡大してきた。現在では、水稲6.0ha、紫ずきん1.7haを中心に、ナス・キュウリ・春菊など多品目の野菜を手がけている。

「紫ずきん」の栽培を始めたのは、今から15年前。前年に就農したばかりの康広さんが、父親とは異なる作目を模索していたところへ、ＪＡの担当者から開発されて間もない京のブランド産品「紫ずきん」を紹介され、「これはいける」とさっそく導入した。

読みは当たった。「反当たりの収益性も高く、就農して４年目には自分が担当している作目のメインになった」と振り返る。いまや地域では紫ずきん生産のリーダー的存在だ。

### 家族経営から法人化へ

労働力は年間を通して康広さんと妻の美香さん（39）、両親の貞夫さん、久子さん（68）の家族４人で、紫ずきんの繁忙期（夏場の約１カ月半）にはパート11

夏場の繁忙期は地域の人たちに支えられて

水稲の担当は父・貞夫さん（右）

９月から10月は紫ずきんの出荷作業のピーク

人を雇用している。

主に康広さんが紫ずきん、貞夫さんが水稲を担当しているが、労力の融通が利きやすい家族経営の利点を生かし、常に適切な労力配分を追求。冬場の野菜の作目選択は家族協議で決めるなど、家族間の意思の共有を大切にしている。

農場が家族経営の形態から、パート従業員を雇用し企業的な経営へと着実に軌道に乗せているのとは対照的に、農家の高齢化は進む一方だ。「５年後、10年後は…。集落を維持していくためにも、経営の法人化は差し迫った課題」と康広さん。それを支えるのはふるさとへの思いであり、誇りである。

## 集落の「農」を支える

実際、経営規模が拡大していくにつれて高齢化した農家から農地を頼まれ、農場が管理している農地はいまでは集落全体の約３分の１に及ぶ。

もっとも平均15ａほどの小区画のうえに急傾斜地の田畑が多く、草刈り等に手間がかかるため、作業効率は正直悪い。また、水稲と紫ずきんはしばしば作業時期が重なるため、負担感はあるが、次世代へ農業を引き継ぐために、世話を頼まれれば可能な限り農地を引き受けている。

集落は“老い”に直面し、共同体の存廃の危機が「農」にも影を落とす。「農地が荒廃すると、やがて行事が廃れ、次第に集落全体が衰退していく。そうならないために、今を大切に農業に取り組んでいきたい」と康広さんは力を込める。

## 攻めと守りの両立めざし

家族４人で経営を行っている下間農場では、効率的な生産体制の確立とともに、販売面ではＪＡ出荷（コメ、紫ずきんの全量）を軸として経営を展開してきた。

康広さんは「現在の経営面積が、作業効率や労力配分を考えると適正規模だと考えている」という。しかし、集落の現実を見据えると、「これから５年～10年先に正社員の雇用など新たな経営展開も必要になる」とも。

目標ははっきりしている。“攻め（紫ずきん）”と“守り（水稲）”の両立だ。農で集落を守り、自身も輝く―そんな道を進む下間農場の経営は、地域にしっかりと根を張っている。

家族で集落の農を支える

# ネギと野菜苗を軸に多彩な複合経営を展開

## ―担い手育成で地域の農業をリード―

チャレンジ農業法人

村田さん（前列右）と次代の担い手たち

### 株式会社 山末農園

久御山町

■代表取締役　村田　和弘
■設立年月　2014年1月
■資本金　500万円
■労働力　家族3名、社員10名（20代5名、30代1名、40代3名、60代1名）、パート10名
■事業内容　「ネギの周年栽培と野菜の複合経営」
施設栽培：九条ねぎ3ha、キャベツ60ａ、野菜苗50ａなど（全部で28棟）
露地栽培：トウモロコシ、タマネギ、ニンジン等、多品目の野菜を各20ａ

### 主役は野菜苗から九条ねぎへ

広域幹線道路の高架橋とマンションが背後に建ち並ぶなか、基盤整備された畑が広がる。代表取締役の村田和弘さん（49）が経営する㈱山末農園は都市近郊の立地条件を生かして、九条ねぎを中心に伝統の野菜苗（淀苗）、タマネギ、ニンジンなどの野菜を手広く展開している。社員は10名、20歳代を中心に次代を担う若手が多いのが特徴だ。

基幹作目は、九条ねぎと野菜苗。農園が立地する木津川と宇治川に挟まれた地区は、古くから淀苗の産地

年間を通じて九条ねぎの安定生産をめざす

「稼げる農業を」と石﨑さんへの指導に熱がこもる

昨年就農した長谷川結女さん（20）は府立農業大学校の卒業生

として知られており、加えて父親の代からネギ加工業者との契約栽培による経営の安定化を図ってきた。

九条ねぎは15年前から栽培してきたが、ちょうど同じ頃からブームになった、ラーメン人気の影響で府内でも生産が増えた。村田さんは「需要が安定している」と２年前にネギの周年栽培体制を確立。売り上げの主力が野菜苗からネギに代わったのを機に法人化した。「冬場の供給量の確保がまだ課題として残っているが、年間を通して安定出荷を図り、雇用の安定につなげていきたい」という。

## 担い手育成にも取り組む

村田さんは、若手の担い手育成にも意欲的だ。平成20年度からスタートした緊急雇用対策や農の雇用事業を通じて新規就農めざす若者を研修生として雇用。独立就農の支援や自社後継者の育成につなげている。「就農をめざす若い人たちの将来を考えると、栽培技術などをきちんと教え、しっかり稼げる農業経営者を育てなければならないと責任を感じるようになった」という。

そのためには、年・月・日ごとの労働時間の配分を適正化した栽培計画の策定が不可欠になる。九条ねぎの生産拡大を受けて最適な品種を選択し、周年栽培を本格的に開始。それが結局、伝統の野菜苗生産とともに主力品目に成長、経営基盤の確立につながった。

また、インターンシップ制度を活用して近隣の大学生の受け入れも行うなど、新たな取り組みも。“社員が安定して働ける環境を整備する”というのが経営方針だが、こうした実践が「経営と雇用の安定」という農園の２つの理念を支えている。

## 多様なニーズに応え野菜栽培

山末農園とネギ加工業者は、長年にわたる契約栽培を通して強い信頼関係で結ばれ、一定の取引価格と契約数量が約束されている。

その九条ねぎから得られる安定した収益をもとに、近年では小売店や仲卸業者からのニーズに応えてホワイトコーンやパクチーなど多品目の野菜を手がけている。農の雇用事業を通じて幹部候補生となった生産・営業担当の石﨑信也さん（38）は「青果店や飲食店からいろんな野菜の注文が増えており、あらゆる要望に対応できるよう多様な野菜を生産していきたい」と話す。

目下の経営課題は、生産コストをいかに削減するか。小区画の畑が多いという欠点を克服するために、圃場間の移動がスムーズにできるトラクターの導入や運搬作業の機械化に取り組んでいる。ただ、ネギの収穫作業はもっぱら手作業に依存しており、「行政やＪＡと連携し、なんとか機械化を」と村田さんは意気込む。

## 生産者同士、連携の輪広がる

山末農園では、自社で研修を受けて独立就農した九条ねぎ生産者と農繁期の労働力を融通し合ったり、生産されたネギの販売を引き受けている。「独立したいという若い人の思いに応えられるよう手助けをしていきたいし、そうすることで自分自身の成長にもつながる」と村田さん。

また、同じネギ加工業者に出荷している地域の５戸の生産農家とも常に情報交換を行い、生産量の変動などに伴うリスクの分散を図っている。今後は、九条ねぎだけでなくキャベツなど他の作目でも同様に、他農家との連携を強めて、飲食店などとの契約をさらに拡大していくつもりだ。

今後はコスト削減と機械化に取り組む

# 農の雇用事業
## 平成28年度募集（５回目）について

（一社）京都府農業会議では、農業法人等が新たに就業希望者を雇用し、農業技術を中心に研修を行う「農の雇用事業」の推進業務を通じ、農業経営者の人材確保と就農促進に取り組んでいます。

京都府内では、これまでにのべ131経営体、411人が取り組まれています。

今年度、第５回募集が10月17日（月）から12月15日（木）まで行われます。予定では、今回が今年度最後の募集となっていますので、ご希望の場合は期日までに必要書類を準備の上、提出してください。

平成28年度第５回募集

| 募集期間 | 研修助成期間 | 正社員採用期間 |
|---|---|---|
| 平成28年10月17日～12月15日 | 平成29年2月～平成31年1月 | 平成28年2月1日～平成28年10月1日 |

# 「京都農人材育成センター」の経営研修が始まります！

今年７月に（公社）京都府農業総合支援センター内に設置した「京都農人材育成センター」では、新規就農後年数の浅い農業者の皆さんを対象とした「就農直後フォロー研修」の受講者を募集しています。

**「就農直後フォロー研修」～将来の目標設定と仲間づくりを目指す！～**

○研修の目指すところ
- 就農計画と現状のギャップに対する課題解決のロードマップづくり
- グループワークを通じた就農者同士の交流による農業経営の仲間づくり

○主な内容
- 先輩農業者の体験談の聴講と意見交換や生産現場視察
- 生産工程管理を通じた自社農場の見える化や農業簿記の記帳方法の演習
- 将来の農業経営に向けた目標と行程表の作成と発表

○日　　時　平成28年11月11日（金）～
全５回（11/11、11/25、12/9、12/16、12/21）　14:00～18:00

○場　　所　福知山公立大学 ４号館

○申込み先　京都農人材育成センター　TEL：075-414-4942　　E-mail：jinzaicenter@agr-k.or.jp

**【今後開講を予定している経営研修】**

「リーダー養成研修」：農業法人の中核を担うリーダーを育成する研修
「農　業　経　営　塾」：経営改善を図る認定農業者やそれを目指す農業者を育成する研修
「農企業者育成研修」：企業的農業経営を目指す法人やそうした法人を目指す農業者を育成する研修

# 空き家・農地の検索サイトがオープンしました

8月1日、京都府と市町村が連携し、空き家及び農地の活用による移住者の受入に積極的な地域（移住促進特別区域）への移住におススメの空き家・農地を紹介するサイトがオープンしました。

4月に府が移住促進条例を制定したことを受け、そのアイテムとして空き家と農地の情報をセットで発信するサイトが創設されました。

農業会議はこのサイトに掲載されるデータの確認及び一部運営管理を担っています。

人口減少社会となった昨今、特に農村においては、地域の担い手の確保が急務となっています。

ひとりでも多くの方に京都へ移住し、充実した生活を送っていただけるよう、移住者に有益な空き家及び農地の情報を発信していきます。皆さまも、身近にある提供可能な空き家や農地があれば、市町村を通じてぜひ情報をお寄せください。

# 「農業体験農園開設セミナー」を開催します

農地を活用して農業体験農園の開設をお考えの方や、今後の農業経営の一手法として農業体験農園に興味をお持ちの方等を対象に、下記のとおり農業体験農園開設セミナーを開催します。

当日は、農業体験農園を巡る全国的な情報などについての基調講演や京都における農園経営の報告等、盛りだくさんの内容が予定されています。

参加費無料、申込締切は11月14日（月）です。ぜひお問合せのうえ、ご参加ください。

日　時：平成28年11月22日（火）13：30から
場　所：京都市花き地方卸売市場　大会議室
（伏見区深草中川原町　阪神高速道路8号京都線　稲荷山トンネル西出口）
内　容：基調講演
次世代の農業活動「農業体験農園」の開設について
講師：原　修吉氏（NPO法人全国農業体験農園協会理事）
報　　告
京都における農園活動について（市街地内の農地活用と課題）
京都農業体験農園・園主会　会長　溝川長雄（すこやかファームおとわ園主）他
申込先：（一社）京都府農業会議　　電話 075-441-3660　FAX 075-441-5742

# 農業法人ニュース

## ― 京都府農業法人経営者会議の取り組み ―

### ■全国セミナー2016in北海道が開催されました

８月22日から23日、北海道で全国農業法人秋季セミナー2016in北海道が開催されました。ちょうど台風が接近し開催が危ぶまれましたが、全国から280名を超える参加があり、会場は熱気に包まれていました。

講演ではロイヤルホールディングス（株）菊池会長（フードサービス協会会長）から、「国内は成長市場から成熟市場に移行しつつある。外食産業と農業との有機的な連携に向け、農業法人協会にがんばってほしい」と期待の言葉がありました。

他府県の視察や交流を通じて経営に役立つ情報が入手できますので次回以降のセミナーや交流会にぜひご参加ください。

(公社)日本農業法人協会
藤岡会長

ロイヤルホールディング(株)
菊池会長

視察：余市ニッカウヰスキー工場、(株)高橋牧場ニセコミルク工房

### ■京都府農林水産部との情報・意見交換会を開催

経営者会議から15名が参加しました。

京都府農林水産部松本部長からあいさつと激励をいただきました。

９月29日（木）、京都市内で府農林水産部長はじめ幹部職員との意見交換会を行いました。

今年は、「農業の人材育成」「農地中間管理事業」をテーマに実施し、「人材育成とあわせて、その人たちが利用できる農地の確保が必要」、「京都府の実情にあった農地中間管理事業の方法を考えてほしい」「輸出対策や、関東での京ブランド戦略の強化」等、充実した交換を行いました。

### 編集局から

◆巻頭に登場いただいた下間さんは、特産物である紫ずきんを中心に、中山間地域の集落とともに歩む家族経営を営まれており、「地域のためにも自分がやらねば」という矜持と意気込みを強く感じました。

◆山末農園の村田さんは、苗産地の伝統を守りつつ、新たに需要が見込めるネギ生産に進出し経営基盤の確立を図るとともに若手育成にも力を入れていることが印象的でした。

◆次号は府内随一のエダマメ生産者と、亀岡市・南丹市で無農薬の野菜栽培を続ける農業者をご紹介する予定です。ご期待ください。

発行／2016年10月
発行者　（一社）京都府農業会議（京都府担い手育成総合支援協議会事務局）
〒602-8054 京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104-2 京都府庁西別館内　TEL.075（441）3660㈹